

# 奄美方言の植物語彙

杉 村 孝 夫

(昭和61年9月10日 受理)

## 1. 植体語彙

植物に関する語彙の全体は、植物語彙ということが出来るが、植物語彙は、大きく次の二つの語彙に区分される。

(1) 植体に関する語彙 人体の各部位の名称に関する語彙は「人体語彙」あるいは「身体語彙」として報告されている(注1)。植物の各部位の名称に関する語彙を、植物語彙全体の中から取り出して「植体語彙」というまとまりを持ったものとして捉えることができれば。植物の全体または一部の変容に関する語彙も植体語彙に属するといえる。

(2) 植物名に関する語彙 植物自体について名づけられた名称に関する語彙は「植物名語彙」ということができよう。

本稿では植体語彙、すなわち、植物の各部位がどのような語形で表されているか、また植体やその部位の変容がどのような語形で表されているかについて、奄美諸島の一つ、沖永良部島の和泊町方言を対象として報告したい(注2)。

植体の部位の名称の記述は、植体に即しておこなう。言語外の世界に物があり、その物を分割して名称を割り当てている場合、言語の世界の記述においても「物」の秩序に即しておこなうことは、語彙記述の一つの方法であろう。

植体語彙を記述の対象とした理由は、植体そのものを一つの基準とした記述を積み重ねることにより、各地方言の比較ができるようになると思ったからである。今回は、その基礎として単一方言を対象とした記述をおこなう。

## 2. 和泊町方言における植物の分類

和泊町方言では、植物は、 $\text{ㇿヒー}$  [ $\text{çi:}$ ] (木)、 $\text{ㇿクサー}$  [ $\text{kusa:}$ ] (草)、 $\text{デー}$  [ $\text{dē:}$ ] (竹)、 $\text{ムー}$  [ $\text{mu:}$ ] (藻、水中植物)、 $\text{ㇿオーヌイ}$  [ $\text{o:nui}$ ] (苔)、 $\text{ホージ}$  [ $\text{hō:d̥ʒi}$ ] (かび)、 $\text{ㇿシミジ}$  [ $\text{ʃimi:d̥ʒi}$ ] (きのこ)に下位区分される。

以下には、部位に関する名称が豊富な、木と草の部位およびその変容に関する語彙を見ていく。

注1 吉田則夫, 1977, 久野マリ子, 1984など。

注2 調査対象地は、鹿児島県大島郡和泊町である。和泊町の中でも、字和泊および手々知名の方言が対象である。以下和泊町方言と呼ぶ。

調査は、昭和59年度文部省科学研究費総合研究 A 「東京方言基礎語彙と諸方言との比較研究」(研究代表者 平山輝男)による。

調査期間は、昭和59年7月～8月および昭和60年3月である。

植物語彙について直接資料を提供して下さったのは、吉田キク氏(女, 農業, 調査時79歳), 日置ミネ氏(女, 元教員, 76歳), 王起タモツ氏(女, 助産婦, 70歳), 竹のぶ氏(女, 民生委員, 64歳), 伊勢達一氏(男, 元教員, 60歳)の方々である。

調査結果全体の報告は、平山輝男編著, 1986として刊行されている。

### 3. 木の部位に関する語彙

3.1 【木】木は①木本植物全体と、②中心部の幹に分かれるが、和泊町方言では両者を語形では区別せず共に、 $\uparrow$ ヒー [ $\text{çi:}$ ] で表す(図1参照)。また、 $\uparrow$ ヒーは③生えている木、およびそれと対照的な、切り倒され、製品の材料として利用される④木材の意でも用いられる。 $\uparrow$ ヒーの関連語として、 $\uparrow$ ヒーヌムン [ $\text{çi: numun}$ ] (<木の物>木の精<sup>注3)</sup>)がある。夜寝ている時、戸などのすき間から家の中に入ってきて人を襲い、動けなくさせると信じられている化物である。枕や箸など木製の器具をそまつにして庭の隅などに投げ捨てておくとそこに棲みつくという。奄美大島の大和村大和浜では、がじゅまるの木が「魔物の棲み家になると伝えられ、伐るとたたりがあると信じられている<sup>注4)</sup>」というが、和泊町では、がじゅまるに関して同様の信仰を聞くことはできなかった。

生えて立っている木は、 $\uparrow$ タチギー [ $\text{tatfigi}$ ] (立木)、枯れ木は、 $\uparrow$ ハリギー [ $\text{harigi}$ ]、立ち枯れの木は、 $\uparrow$ タチガリギー [ $\text{tatfigarigi}$ ] である(5.16【枯れる】の項参照)。

薪は $\uparrow$ タームン [ $\text{ta:mun}$ ]、タムヌ [ $\text{tamunu}$ ] という。しかし、主として蘇鉄やあだんの葉、落ち松葉や砂糖黍の絞りかすなどを薪としたのであって、「木は、貴重なので燃やしたりはしなかった」という。割った木は、ワイキ [ $\text{waiki}$ ] という。

また、ヒーヌミー [ $\text{çi: numi}$ ] (木の実)、 $\uparrow$ ヒーヌマタ [ $\text{çi: numata}$ ] (木の又)などの複合語もある。

これら「木」という語構成要素を持つ諸語形の相互関係を図示すれば、図2のようになる。

3.2 【皮・芯】幹は、内側に向かっては、 $\uparrow$ ホー [ $\text{ho}$ ] (皮)と $\uparrow$ シン [ $\text{fin}$ ] (芯)に分けられる(図1参照)。

バシャ $\uparrow$  [ $\text{baša}$ ] (芭蕉)には実を食べる芭蕉と糸をとる芭蕉がある。後者は、 $\uparrow$ シマバシャ [ $\text{šimabaša}$ ] (<島芭蕉>在来)の芭蕉)という。これは、幹の部分の芭蕉布、食品等に利用するために細かく言い分けられている。まず、皮をはいだものは、 $\uparrow$ バシャゴタ [ $\text{bašagota}$ ] といい、草履の鼻緒に使った。芯は、 $\uparrow$ マーグー [ $\text{ma:gu}$ ] といい、茹でて酢の物にして食べた。バシャ $\uparrow$ ヌ シ $\uparrow$ ン [ $\text{bašanufin}$ ] <芭蕉の芯>は、 $\uparrow$ マーグーの外側

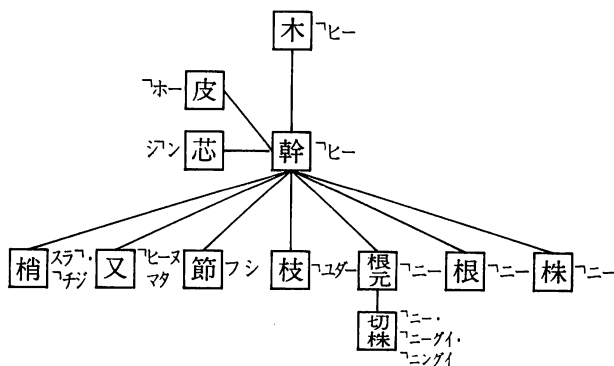


図1 木の部位に関する語彙

注3 語形的に対応する共通語形を< >内に、方言語形の意味を( )内に示す。

注4 長田須磨, 須山名保子, 1977, p. 822

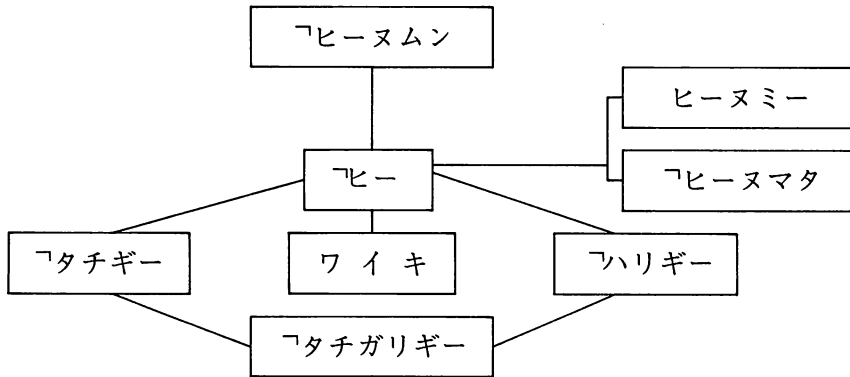


図2 木に関する諸語形の相互関係

の最も利用価値の高い部分であり、ここから繊維を取り、芭蕉布を織る。アラバシヤ [ʔa rabajə] というのは、バシヤ<sup>1</sup>ヌ シ<sup>1</sup>ンの外側の部分であり、干して草履などにした。これら4つの層は、まず<sup>1</sup>ホーとシ<sup>1</sup>ンの2層に分かれ、<sup>1</sup>ホーは草履やその鼻緒にする<sup>1</sup>バシヤゴタとアラバシヤの2層に下位区分される。シ<sup>1</sup>ンが、繊維を取る部分と中心部の酢の物にして食べる、バシヤ<sup>1</sup>ヌ シ<sup>1</sup>ンと<sup>1</sup>マーグーの2層に下位区分されるのである。芭蕉の幹の部分に関する以上の諸語形を図示すれば、図3のようになる。

3.3 【幹】(図1参照) 幹は、上方のスラ<sup>1</sup> [surə] (<空>先), <sup>1</sup>チジ [tʃiːdʒi] (梢) と、下方の<sup>1</sup>ニー [ni:] (根元) に分割される。スラ<sup>1</sup>と<sup>1</sup>ニーは、対義語として、スラ<sup>1</sup>ヨ

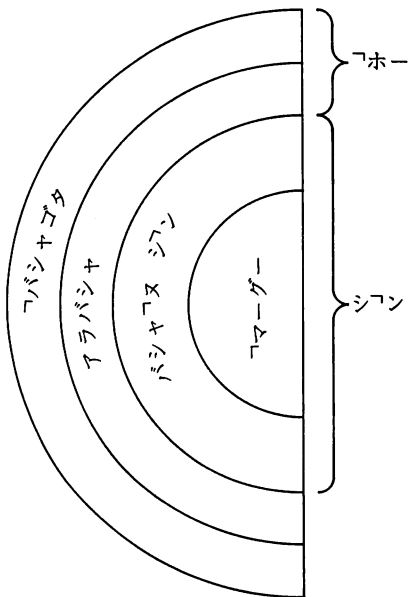


図3 芭蕉の幹の内部に関する語彙

カ <sup>1</sup>ニードゥ <sup>1</sup>マサ<sup>1</sup>ン [surajoka ni:du mʔasan] (<砂糖黍は>先の方より根元がうまい) のように用いられる。スラ<sup>1</sup>は、木や草の先という意味であるが、<sup>1</sup>チジの方は指す範囲が広く、植物のみならず、山・屋根・煙突のてっぺんの意でも用いられる。幹のあちこちには、<sup>1</sup>ユダー [juda:] (枝), <sup>1</sup>ヒームマタ [çi: numata] (木の又), フシ [fuʃi] (節)<sup>(注5)</sup> がある。

根元を切った後に残る切株は、<sup>1</sup>ニー, <sup>1</sup>ニーグイ [ni:gui], <sup>1</sup>ニングイ [ningui] という。

3.4 【根】<sup>1</sup>ニーと<sup>1</sup>ニーグイ, <sup>1</sup>ニングイとの関係は表1のようである。

<sup>1</sup>ニーは、根元、根、株(「株を分ける」などという場合)の他、木・竹・草の切株を指す。一方、<sup>1</sup>ニーグイと<sup>1</sup>ニングイは、木・竹の切株は指すが、草の切株は指さない。しかし、できものの芯を指す。<sup>1</sup>ニングイの方は、さらに、

注5 竹の節は、木とは区別して、<sup>1</sup>デーブシ [de:buʃi] <竹節> という。なお、人間の関節もフシという。

表1 ㄱニーと ㄱニーグイ, ㄱニングイとの関係

指示対象 語形	根 元	根	株	切 株 (木・竹)	切 株 (草)	できもの の芯	あおさの根の先の貝や砂がついている部分、きのこの石突き、貝の岩などについている部分
ㄱニー	○	○	○	○	○	×	×
ㄱニーグイ	×	×	×	○	×	○	×
ㄱニングイ	×	×	×	○	×	○	○

あおさの根の先の貝や砂がついている所、きのこの石突き、貝の岩などについている部分をも指す。ㄱニーグイ, ㄱニングイに共通する意味は、物が他のものに着いていて取れにくい部分というほどである。

松の枯れた枝、切株は、共有物として薪に利用できる慣習があった。松の切株を割ったものには、ㄱチャーラー [kja:ra:]、ㄱチャーラ [kja:ra] という名称がある。これは薪として利用したために特に名づけられたものである。蘇鉄の実を砕いたものも ㄱチャーラーという。これは、水や日光でさらして毒を取り、澱粉にした。

根には、定根（胚の幼根が生長した根）と不定根（茎または葉から出る根）とがあり、定根は主根と鬚根（ひげね、側根とも）に分かれる。和泊町方言では、定根と主根は ㄱニーといい、不定根と鬚根は、ヒジー [çi⁴ʒi:] 〈鬚〉という。がじゅまるなどの気根もヒジーである。ヒジーの小さいものは、ㄱヒジグワー [çi⁴ʒigwa:] という。

球根は、ㄱタマー [tama:] 〈玉〉という。沖永良部島は古くから百合の球根の栽培がさかんなので、ユイダマ [juidama] 〈百合玉〉という言い方もあるが、ㄱタマーというだけでも百合の球根を指す。

以上の根に関する諸語形を図示すれば、図4のようになる。

3.5 【枝】 次の各部位は、枝の下位部に位置づけることができる。ミー [mi:] (芽)<sup>注6</sup>、チブミ [tʃibumi] (蕾)、ㄱクムイ [kukumui] (百合の花などの開く前のふくらみを帯びた蕾)、ファー [fa:] (葉)、ㄱハナー [hana:] (花)、ミー [mi:] (実)。なお、枝の先のように、細長いものの細くなっている方の端は、サチ [satʃi] という。杭や傘の先もサ

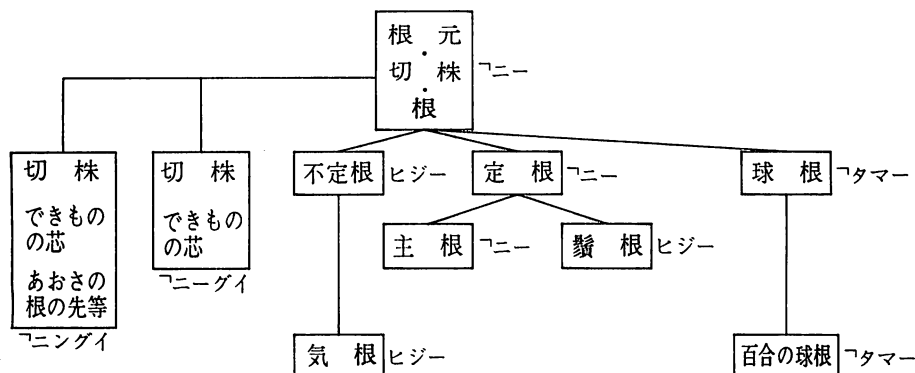


図4 根に関する語彙

注6 芽は、幹や種からも出るが、便宜的にここに記す。

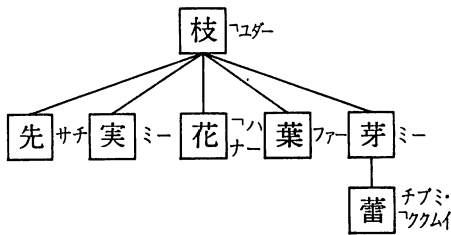


図5 枝に関する語彙

チである。

以上を図示すれば、図5のようになる。

3.6 【芽】花芽，葉になる芽，種から出た芽のいずれもミー [mi:] という。若芽・新芽は「ワーミー」[wa:mi:] 〈若芽〉である。また，ビ「ングワ」[biŋgwa] ともいう。砂糖黍や野菜類の脇芽は，「マタビャー」[mataɸja:] 〈又生え〉という。砂糖黍

の最初に出た芽を，「イチバンダシ」[ʔitɸibandaɸi] 〈一番出し〉，一度刈って二度目に出た芽を，「ニバンダシ」[nibandaɸi] 〈二番出し〉などという。「ニバンダシ」の方がかえってよくのびるという。肥えた畑では「四番」まで出すこともあったという。

3.7 【蕾】蕾は，チブミ [tɸibumi] と「ククムイ」[kukumuɸi] とに分かれる点が特徴的である。花の蕾の開きかけてふくらみを帯びたものを，「ククムイ」，「ククマイ」[kukumaɸi]，「クグモイ」[kugumuɸi] といって，その他の蕾とは区別する。ばなな（芭蕉の実）の花を保護している包葉も「ククムイ」という。

3.8 【葉】葉に関する語彙には，葉の部位に関するものと，葉自体の変容に関するものがある。葉の部位には，「ファース」[fa:nu ɸi:]（葉の柄）と「ファース シジ」[fa:nu ɸiɸɸi:]（〈葉の筋〉葉脈）がある。葉の柄を，「ファース」[fa:nu ɸuɸi:] 〈葉の骨〉という。「大げさな感じ」であり，「固いものについて言っているような感じ」がするという。葉脈の意で「ファース」[fa:nu ɸuɸi:] とはいわない。「ターニム」[ta:nimu]（田芋）の葉の柄は皮をむいて食べるところから，「ムジー」[muɸɸi:] という。「サトゥウム」[satuumu]（里芋）の葉の柄のような利用しない場合は，葉と葉の柄は区別せず，全体を「ファース」という。

芭蕉の葉は，「ハシャヌファ」[haɸanufa]（古い言い方，「バシャヌファ」[baɸanufa] が一般的）といってにぎり飯などを包んだ。魚は，「ユゴバシャ」[jugobaɸa]（くわす芋）の葉で包んで売りに来ることがあったという。

葉自体の変容に関する語彙には，「ワーバー」[wa:ba:]（若葉），「オーバー」[o:ba:]（青葉）などの他多くの語がある。「ワーバー」に対しては「ウイバー」[uiɸa:]（〈老葉〉古くて固くなった葉）などといいそうだが，この語はあまり使わないで，普通は，「ウイタヌ」[uitanu]（〈老いた葉〉）と，形容詞の連体形を用いた複合形で表す。若葉にも同様の表現形式の「ワースヌ」[wa:sanu]（〈若い葉〉）という言い方ができる。

「紅葉」に該当する語はない。葉が赤くなることは，「アース」[a:sa]（赤くなった），黄色くなることは，「キース」[ki:sa]（黄色くなった）という。まとめて，「イロヌ カワタン」[ironu kawatan]（色が変わった）ともいう。赤くなった葉は，「アース」[a:sa]（赤葉）という。はぜの木が8月上旬頃などに赤く色づくことはあるが，これは「紅葉」の概念には入らず，その他には「紅葉」に該当する現象はみられない。生垣や庭木として植えられる「くろとん」は葉に赤や黄の色がつくが，「キース」[ki:sa]（黄葉），「キースヌ」[ki:sanu]（黄色い葉）というのは「くろとん」の黄色い葉のことである。「キース」[ki:sa]（黄葉）というのもクロトンの葉が黄色くなる場合という。

「落葉」に該当する語もなく，「ウティタヌ」[utitanu]（落ちた葉）とし

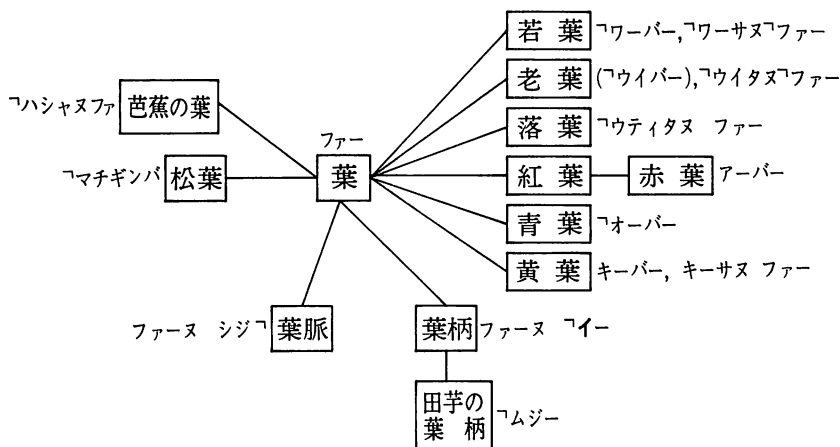


図6 葉に関する語(句)

かいわない。\*ウティバーなどとはいわない。

松葉は ʔマチギンバ [matʃigimba] という。枝についている青い葉も、枯れて落ちている葉も ʔマチギンバである。松の枯葉は薩摩芋を主食としていた頃、それを煮るための重要な燃料であった。松林の中でかき集めた松葉を山にして蘇鉄の葉を立てておくとして所有権の印となった。松葉以外の葉は、ʔクリブンギーヌ ファー [kuribuggi:nu fa:] (みかんの葉), ʔガジマルヌ ファー [gaʒimarunu fa:] (がじゅまるの葉) のように樹木名の後に、ヌ ファー [nu fa:] (の葉) をつけて表す。

以上の葉に関する語(句)を図示すれば、図6のようになる。

3.9 【花】 ʔハナー [hana:] (花) の「一重」, 「八重」は、チュフェー [tʃu:fe:] , ヤ] エー [jae:] というが、新しい言い方である。

3.10 【実】 ミー [mi:] は、比較的小粒の実を指す。ʔクワーギヌ ミー [kwa:gi:nu mi:] (桑の実), ʔヤマムムヌ ミー [jamamumu:nu mi:] (やまももの実), ʔイチュビヌ ミー [ʔitʃubin mi:] (野苺の実) など。これらの実を、ヒーヌミー [çi:numi:] (木の実) ともいう。ヒーヌミーという、食用になる実という意味を含む。ふくぎ、がじゅまるの実は食用にはならず、ʔタニー [tani:] <種> という。特に、ふくぎの実は、フクギンダニ [ʔukugindani] という。

また、ʔホー [ho:] (皮) に対して、実の中味もミーという。

ʔナイ [nai] <生り> は、比較的大粒の実を指す。ʔアダニヌ ʔナイ [ʔadaninu nai] (あだんの実), ヒャーギヌ ʔナイ [ɕa:gi:nu nai] (いぬまきの実), ʔクワーギヌ ʔナイ [kwa:gi:nu nai] (桑の実), ʔミンコギヌ ʔナイ [minʔkoginu nai] (いぬびわの実) など。やまももや野苺の実のような小粒のものは、ʔナイとはいわない。桑の実は、ミーとも ʔナイともいう。あだんの実は、食べたことはあるが、通常食用とはしない。そこでミーとはいわない。しかし、大粒なので ʔナイという。また、瓜類の実も ʔナイという。

ʔナイムン [naimu:] <生り物> は、みかん、ばんしょう、ざくろ、ばななど比較的大粒の実を指す。ぱぱいやの実は熟す前に野菜、漬物として利用するが、ʔナイムンの類に入る。ʔナイムンが多くできると、その家は不幸になるという俗信がある。

クダモノ [kudamono] (果物) は、共通語的言い方で、最近外から入ってきた、りん

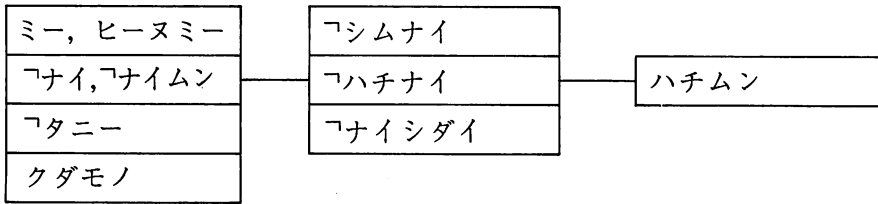


図7 実に関する諸語形の相互関係

ど, なし, おどう, めろん, 夏みかん, とまとなどを指す。

その他, 実に関する語には次のようなものがある。シムナイ [ʃimunaĩ] <下生り> は季節外れの生り物, ハチナイ [hatʃinaĩ] <初生り> は成長して初めて生った実。ハチムン [hatʃimun] <初物> は時期になって初めてとれた実や農産物。近海でとれる魚については, ハチムンとはあまりいわない。ナイシダイ [naiʃidaĩ] は豊作の意で, みかん, 瓜, 米など多く収穫することである。

実に関する諸語形の相互関係は, 図7のようになる。

3.11 【種】タニー [taniĩ] は①果物・野菜・木の実などの種, 稲の種の意の他, ②木・草の苗, ③前記の, ふくぎ・がじゅまるの実のような, 比較的小粒で食用にならない実の意もある。さらに, ④動物の父親因子, ⑤比喩的に, 人間の父系の血筋の意としても用いられる。

3.12 【へた】ヒター [çitaĩ] は①なす, みかんなどのへたである。チッタ [tʃitta] という人もある。チッタには, その他②かさぶた, ③巻貝の薄い蓋の意もある。ハンジッタ [handʒitta] というと, さざえの蓋の意であり, 大きくて厚みのあるさざえの蓋と, その他の巻貝の薄い蓋を区別している。さざえの蓋ではおはじきをしたので, ハンジッタといえはおはじきの意でもある。

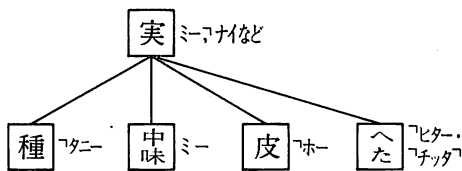


図8 実に関する語彙

以上の実, 種, へたに関する語を図示すれば, 図8のようになる。

#### 4. 草の部位に関する語彙

以下には, 根, 芽, 花, 葉などすでに3. 木の部位に関する語彙で記したものの以外について記す。

4.1 【茎】茎はクーチー [ku:tʃiĩ] という。薩摩芋の葉のついた茎は, ハジラ [haʒi ra] <葛>という。ハジラは, 浜昼顔という植物名でもある。

4.2 【蔓】かぼちゃや薩摩芋などの蔓, その他蔓性植物の蔓は, チル [tʃiru] という。ただし, かぼちゃの蔓が這っている場合は, ティヌ ホーティ [tinu ho:ti] <手が這って>という。チルは①植物の蔓の他②鍋などのつり手(急須の取手は, 柄のつき出たものも, つり手状のものも)イー [jiĩ] <柄>という), ③三味線の絃の意もある。

4.3 【穂】稲, 麦, すすきなどの穂は, フー [fuĩ] という。砂糖黍の先端は, フーとはいわず, ウジヌ スラ [ʔuʒinu sura] (砂糖黍の先)といい, 切って牛の飼料とする。

4.4 【のぎ】稲や麦などの実の穀にある堅い毛は, ヒー [çiĩ] という。

4.5 【とげ】ばらなどのとげは, ニジ [niʒiĩ] という。木・竹のささくれが皮膚にささ

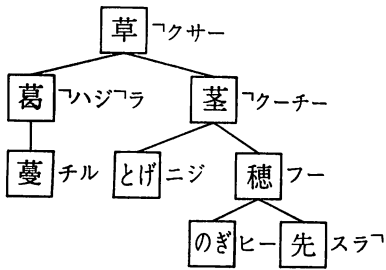


図9 草に関する語彙

ったもの、魚の小骨が喉にささったものもニジである。

以上の、草に関する語を図示すれば、図9のようになる。

## 5. 植物の変容に関する語彙

5.1 【(芽が)出る】 $\uparrow$ イジユン  $[\uparrow i^d \text{gi}ju\bar{n}]$  ①種から芽が出る。例えば、ミーヌ  $\uparrow$ イジユン  $[\text{mi}:\text{nu} \uparrow i^d \text{gi}ju\bar{n}]$  (芽が出る)。ミーヌ  $\uparrow$ フチジティ

$\uparrow$ キユン  $[\text{mi}:\text{nu} \text{f}ut\text{ʃi}^d \text{gi}ti \text{kju}\bar{n}]$  (芽がふきだしてくる)ともいう。②木の幹や枝、草の茎から若芽が出る。例えば、 $\uparrow$ ワームヌ  $\uparrow$ イジユン  $[\text{wa}:\text{mi}:\text{nu} \uparrow i^d \text{gi}ju\bar{n}]$  (若芽が出る)。この場合、チブミン  $[\text{tʃi}^d \text{bumi}\bar{n}]$  とかツブミン  $[\text{tsu}^d \text{bumi}\bar{n}]$  ともいう。例えば、ミーヌ チブミガカ $\uparrow$ ティ  $\uparrow$ キチャン  $[\text{mi}:\text{nu} \text{tʃi}^d \text{bumigakati} \text{kitʃa}\bar{n}]$  (芽が出かかってきた)といえは樹皮や茎から芽が出かかってきたことである。

5.2 【蕾がふくらむ】この場合もチブミン  $[\text{tʃi}^d \text{bumi}\bar{n}]$  という。例えば、チブディ  $\uparrow$ キチャン  $[\text{tʃi}^d \text{budi} \text{kitʃa}\bar{n}]$  (蕾がふくらんできた)。チブミンは娘が年頃になるという意味でも用いられる。

チブミヌ  $\uparrow$ クグモイハジミタン  $[\text{tʃi}^d \text{bumi}:\text{nu} \text{kugumoiha}^d \text{gimita}\bar{n}]$  (蕾がふくらみはじめた)ともいう。

5.3 【のびる】 $\uparrow$ ヌビユン  $[\text{nubi}ju\bar{n}]$  ①(芽が)のびる。例えば、ミーヌ  $\uparrow$ イジティ  $\uparrow$ ヌダン  $[\text{mi}:\text{nu} \uparrow i^d \text{gi}ti \text{nuda}\bar{n}]$  (芽が出てのびた)。②(ごむ紐が)のびる。例えば、 $\uparrow$ ゴムヒムヌ  $\uparrow$ ヌビタン  $[\text{gomu}^d \text{himu}:\text{nu} \text{nubi}ta\bar{n}]$  (ごむ紐がのびた)。③(髪、ひげが)のびる。例えば、ヒジヌ  $\uparrow$ ヌビタン  $[\text{çi}^d \text{ʒi}:\text{nu} \text{nubi}ta\bar{n}]$  (ひげがのびた)。ただし、新しい言い方。従来の言い方は、 $\uparrow$ ナガサ  $\uparrow$ ミートゥ $\uparrow$ ン  $[\text{naga}:\text{sa} \text{mi}:\text{tu}\bar{n}]$  (長く生えている)である。

草がのびる場合は、 $\uparrow$ タカサ  $\uparrow$ ナユン  $[\text{takasa} \text{naju}\bar{n}]$  (高くなる)という。枝がのびる場合は、 $\uparrow$ シギユン  $[\text{ʃigi}ju\bar{n}]$  (繁る)、海草のあおさが成長する場合は、 $\uparrow$ ミーユン  $[\text{mi}:\text{ju}\bar{n}]$  (生える)という。

5.4 【生える】 $\uparrow$ ミーユン  $[\text{mi}:\text{ju}\bar{n}]$  ①木、草、かびなどが生える。例えば、 $\uparrow$ クリブンギーヌ  $\uparrow$ ミートゥ $\uparrow$ ン  $[\text{kuri}^d \text{buggi}:\text{nu} \text{mi}:\text{tu}\bar{n}]$  (みかんの木が生えている)、フチ $\uparrow$ ヌ  $\uparrow$ ミーティ  $\uparrow$ キチャン  $[\text{f}ut\text{ʃi}^d \text{nu} \text{mi}:\text{ti} \text{kitʃa}\bar{n}]$  (よもぎが生えてきた)、ナガアミヌ チジチ  $\uparrow$ タタミニ ホージガデ  $\uparrow$ ミータン  $[\text{nagaami}:\text{nu} \text{tʃi}^d \text{ʒitʃi} \text{tatamini} \text{ho}^d \text{ʒigade} \text{mi}:\text{ta}\bar{n}]$  (長雨が続いて畳にかびまでが生えた)、 $\uparrow$ オーサヌ  $\uparrow$ ミートゥ $\uparrow$ ン  $[\text{ʔo}:\text{sanu} \text{mi}:\text{tu}\bar{n}]$  (あおさが生えている)。②(髪やひげが)のびる。例えば、ヒジヌ  $\uparrow$ ミータン  $[\text{çi}^d \text{ʒi}:\text{nu} \text{mi}:\text{ta}\bar{n}]$  (ひげがのびた)。

5.5 【繁る】 $\uparrow$ シギユン  $[\text{ʃigi}ju\bar{n}]$  木、草が繁る。枝が伸びて繁る。例えば、 $\uparrow$ ユダヌ  $\uparrow$ シギトゥ $\uparrow$ ン  $[\text{juda}:\text{nu} \text{ʃigi}tu\bar{n}]$  (枝が伸びて繁っている)。

$\uparrow$ ミーシギユン  $[\text{mi}:\text{ʃigi}ju\bar{n}]$  <生え繁る>草が伸びる場合という。

$\uparrow$ オーブクリユン  $[\text{ʔo}:\text{bukuri}ju\bar{n}]$  <青張れる>①(木の葉が)青々と繁る。例えば、 $\uparrow$ ワームバヌ  $\uparrow$ オーブクリティ  $\uparrow$ ウ $\uparrow$ ン  $[\text{wa}:\text{ba}:\text{nu} \text{ʔo}:\text{bukuri}ti \text{ʔu}\bar{n}]$  (若葉が青々と繁っている)、 $\uparrow$ オーブクリタヌ  $\uparrow$ ヒー  $[\text{ʔo}:\text{bukurita}:\text{nu} \text{çi}:\bar{n}]$  (青々と繁った木)。②(草が)青々



と繁る。例えば、 $\text{クサヌ}$   $\text{クオーブクリティ}$   $\text{クミートゥン}$  [ $\text{kusanu} \text{ } ^\circ\text{o:bukuriti} \text{ mi:tun}$ ] (草が青々と繁って生えている)。③ (薩摩芋) 葉が繁り過ぎる。例えば、 $\text{ハジ}$   $\text{クオーブクリティ}$   $\text{ミーヌ}$   $\text{ナラン}$  [ $\text{ha}^{\text{d}}\text{giranu} \text{ } ^\circ\text{o:bukuriti} \text{ mi:nun} \text{ naran}$ ] (薩摩芋の葉が繁り過ぎて芋ができない)。

$\text{シゲトゥン}$  [ $\text{ʃigetun}$ ] は、砂糖黍、すすきなど、立ち上がる草が繁っている場合にある。例えば、 $\text{ウジヌ}$   $\text{シゲトゥン}$  [ $\text{ } ^\circ\text{u}^{\text{d}}\text{ginu} \text{ ʃigetun}$ ] (砂糖黍が繁っている)。

$\text{ヒーヌ}$   $\text{シゲックワ}$   $\text{シーウ}$   $\text{ン}$  [ $\text{çi:nu} \text{ ʃigekkwa} \text{ ʃi:un}$ ] は、木が繁っているという意味である。

5.6 【育つ】 $\text{フディユン}$  [ $\text{fudijun}$ ] ①木が高くのびて大きくなる。例えば、 $\text{クリブンギーヌ}$   $\text{フディティ}$   $\text{キチャン}$  [ $\text{kuribungi:nu} \text{ fuditi} \text{ kitʃan}$ ] (みかんの木が伸びて大きくなってきた)、 $\text{ウヌ}$   $\text{ヒヤ}$   $\text{ウトウルシャ}$   $\text{フディタン}$   $\text{ヤー}$  [ $\text{ } ^\circ\text{unu} \text{ çi:ja} \text{ } ^\circ\text{uturuʃa} \text{ fuditān:ja}$ ] (この木はとて大きくなったねえ)。木が大きく育つことは、 $\text{フイサ}$   $\text{ナユン}$  [ $\text{fuisa} \text{ najun}$ ] (大きくなる) ともいう。②人の背丈が高くなる。③薩摩芋などが大きくなる。例えば、 $\text{ファース}$   $\text{イチャントウニ}$   $\text{ウムヌ}$   $\text{フディタンド}$   $\text{ー}$  [ $\text{fa:nu} \text{ ji} \text{ } ^\circ\text{tʃantuni} \text{ } ^\circ\text{umunu} \text{ fuditando:}$ ] (葉が<坐った>勢いがなくなったので薩摩芋が大きくなっているぞ)。④家畜が太って大きくなる。例えば、 $\text{ワース}$   $\text{フディタン}$  [ $\text{ } ^\circ\text{wa:nu} \text{ ruditān}$ ] (豚が太った)。

5.7 【巻きつく】 $\text{ハラマチュン}$  [ $\text{haramatʃun}$ ] (蔓が) からみついている。例えば、 $\text{チルヌ}$   $\text{ハラマチュン}$  [ $\text{tʃirunu} \text{ haramatʃun}$ ] (蔓がからみついている)。

$\text{マチュン}$  [ $\text{matʃun}$ ] 巻く。例えば、 $\text{チル}$   $\text{マカチュン}$  [ $\text{tʃiru} \text{ makatʃun}$ ] (蔓を巻かせておく)、 $\text{チルヌ}$   $\text{マキチチ}$  [ $\text{tʃirunu} \text{ makitʃitʃi}$ ] (蔓が巻きついて)。

5.8 【張る】 $\text{ハトゥン}$  [ $\text{hatun}$ ] (根が) 張っている。例えば、 $\text{ニーヌ}$   $\text{ハトゥン}$  [ $\text{ni:nu} \text{ hatun}$ ] (根が張っている)。根が深い場合は、 $\text{フカサ}$   $\text{ン}$  [ $\text{fukasa:n}$ ] という。

5.9 【咲く】 $\text{サチュン}$  [ $\text{satʃun}$ ] (花が) 咲く。例えば、 $\text{ハナヌ}$   $\text{サチュン}$  [ $\text{hananu} \text{ satʃun}$ ] (花が咲く)。季節外れに咲くことは、 $\text{トゥキナーヌ}$   $\text{サチカタ}$  [ $\text{tukina:nu} \text{ satʃikata}$ ] <時無し咲き方> という。 $\text{トゥキナシザキ}$  [ $\text{tukinaʃi}^{\text{d}}\text{zaki}$ ] <時無し咲き> ともいう。季節はずれの花は、 $\text{トゥキナシバナ}$  [ $\text{tukinaʃibana}$ ] <時無し花> という。

5.10 【しぼむ】 $\text{シブミン}$  [ $\text{ʃibumia}$ ] ①日照りのためや切り取ったために花がしおれる。例えば、 $\text{ハナヌ}$   $\text{シブディ}$   $\text{キチャン}$  [ $\text{hananu} \text{ ʃibudi} \text{ kitʃan}$ ] (花がしおれてきた)。②花が咲き終えてしぼむ。例えば、 $\text{シブディ}$   $\text{ウティタン}$  [ $\text{ʃibudi} \text{ } ^\circ\text{utitan}$ ] (しぼんで落ちた)。シブミンと同様の意のチブミン [ $\text{tʃibumia}$ ] は古い語形である。

5.11 【散る】「散る」に該当する語は無く、 $\text{ウティユン}$  [ $\text{ } ^\circ\text{utijun}$ ] (落ちる) で表す。

5.12 【落ちる】 $\text{ウティユン}$  [ $\text{ } ^\circ\text{utijun}$ ] ① (花が) 落ちる。例えば、 $\text{ハジヌ}$   $\text{フチャントウニ}$   $\text{ハナヌ}$   $\text{ウティタン}$  [ $\text{ha}^{\text{d}}\text{ginu} \text{ futʃantuni} \text{ hananu} \text{ } ^\circ\text{utitan}$ ] (風が吹いたので花が落ちた)。②実が熟して落ちる。例えば、 $\text{クリブヌ}$   $\text{ウイキリティ}$   $\text{ウティタン}$  [ $\text{kuribunu} \text{ } ^\circ\text{uikiriti} \text{ } ^\circ\text{utitan}$ ] (みかんが熟しきって落ちた)。

5.13 【生る】 $\text{ナユン}$  [ $\text{najun}$ ] 果物、実などができる。例えば、 $\text{クリブヌ}$   $\text{ナトゥン}$  [ $\text{kuribunu} \text{ natun}$ ] (みかんが生っている)。

$\text{シガトゥン}$  [ $\text{ʃigatun}$ ] ①群がって生っている。例えば、 $\text{クリブヌ}$   $\text{シガトゥン}$  [ $\text{kuribunu} \text{ ʃigatun}$ ] (みかんが群がって生っている)。②子供などが集まってまとわりついている。例えば、 $\text{シェートウヌ}$   $\text{シェンシェイニ}$   $\text{シガトゥン}$  [ $\text{ʃe:tunu} \text{ ʃenʃeini}$ ]

[sigatun] (生徒が先生のまわりに集まってまとわりついている)。

「鈴なり」に該当する語形はなく、[フーサ シガトゥン [fu:sa sigatun] (たくさん群がって生っている) という。

[ウムティドゥシ [ʔumutiduʃi] (表年), [ウラドゥシ [ʔuraduʃi] (裏年) という言い方はあるが、あまり使わない。

5.14 【熟す】[ウミン [ʔumiŋ] ①木の実や果物が熟す。例えば、[バンシルヌ [ウダン [baŋʃirunu ʔudaŋ] (ばんしろろが熟した)。②稲の実が熟す。例えば、[イニヌ [ウダン [ʔininu ʔudaŋ] (稲の実が熟した)。③瓜類が熟す。この場合は種ができるという意味。例えば、[パパヤヌ [ウディ キーサ [ナタン [papa:janu ʔudi ki:sa nataŋ] (ぱぱいやが熟して黄色くなった)。野菜として利用するには不適當になるということである。

[ウイキリ [ʔuiki:ri] ④植物については、ばなな、みかんなどの熟しきった実。動詞形で、[ウイキリタントゥ [カマラン [ʔuikiritantu kamaraŋ] (熟しきって食べられない) ともいう。②人間については、元気で口やかましい年寄り。

[ウイキリトゥン [ʔuikirituŋ] ④木の実、果物が熟しきっている状態。瓜類の場合は、種が入ったり、固くなったりしている状態。例えば、[ナビーラヌ [ウイキリトゥン [nabi:ranu ʔuikirituŋ] (へちまが熟しきって固くなっている)。人間については、②子供がませていること、③(男女ともに)成人が婚期を過ぎていること。

[ウミキリユン [ʔumikirijuŋ] 熟しきる。例えば、[ウミキリティドゥ マサ [ʔumikiritidu mʔasaŋ] (熟しきったのがうまい)。

[マーリユン [mʔa:rijuŋ] 稲が稔る場合についてのみ用いる。例えば、[イニ [フーサ [マーリタン [ʔini fu:sa mʔa:ritaŋ] (稲がたくさん稔った)。

イッチュン [ʔittʃuŋ] 薩摩芋などができている。例えば、[ウムヌ イッチュンド [ʔumunu ʔittʃundo:] (薩摩芋ができているぞ)。

5.15 【しなびる・しおれる】[ネーユン [ne:juŋ] ①なすなど、水分が失なわれて乾く。例えば、[ナースビス [ネータン [na:subinu ne:taŋ] (なすがしなびた)。②水分が失なわれて甘みが強くなる。薩摩芋について言う。例えば、[ウムワ [ネーシバドゥ マサ [ʔumuwa ne:ʃibaðu mʔasa:ru] (薩摩芋は、水分をとばすのこそうまい)。③花、草などがしおれる。例えば、[クサヌ [ネーハジミタン [kusa:nu ne:haʔgimitaŋ] (草がしおれはじめた)。

5.16 【枯れる】[ハリユン [harijuŋ] ①植物が枯れる。例えば、[ヒーヌ [ハリタン [çi:nu haritaŋ] (木が枯れた)。②声が枯れる。例えば、[フイヌ [ハリタン [fu:inu haritaŋ] (声が枯れた)。③水が枯れる。例えば、[チンチョヌ ミジヌ [ハリタン [tʃintʃonu miʔginu haritaŋ] (井戸の水が枯れた)。

[タチガリユン [tatʃigarijuŋ] 立枯れする。例えば、[ドゥ [ワ [タチガリガチャナ チルヌ マキチチ [ハナヌ [サチュ [サ [du:wa tatʃigarigatʃana tʃirunu makitʃitʃi hananu satʃusa] (自分は立枯れしながら、蔓が巻きついて花が咲いているよ)。

[タチガリ [tatʃigari] 生えて立ったまま枯れていること。

[シューガリ [ʃu:gari] 塩分で植物が枯れること。台風のと きなど、よく砂糖黍が塩枯れの害にあう。

枯れた草木は次のようにいう。[ハリクサ [harikusa]。(枯草), [ハリギー [harigi:]

(枯木), ㇿタチガリギー [tatʃigarigĩ] (立枯れしている木), ハリイダ [hariida] (枯枝)。  
 5.17 【腐る】ㇿクサリユン [kusarijũ] ①食べ物が腐る。例えば, ㇿウムヌ ㇿクサリタ  
 ン [ʔumunũ kusaritã] (薩摩芋が腐った)。

ㇿフクチー [fukutʃĩ] 木が腐りかかってふかふかになったもの。火持ちがよいので戦  
 争中頃まで火種として使っていた。

最後に, 草木からの分泌物をとりあげることとする。

5.18 【汁】ㇿシルー [ʃirũ] ①樹木, 草, 果物などの汁。草の青い汁と薩摩芋の茎など  
 から出る白い乳のような汁とを語形で区別することはない。②みそなどで味をつけた飲  
 食物。

5.19 【やに】ヤニㇿ [janĩ]。松やには, ㇿマndanニ [mandanĩ] という。

5.20 【渋】ㇿシブ [ʃibũ]。芭蕉の切株にたまる渋は, 美濃紙につけて渋張りの三味線と  
 した。

#### 主な参考文献

- 北村四郎, 村田 源, 小山鐵夫, 1957~1971 『原色日本植物図鑑』草本編, 木本編, 保育社  
 鹿児島民俗植物記刊行会, 1964 『鹿児島民俗植物記』, 同刊行会  
 大井次三郎, 1967 『標準原色図鑑全集』9 植物 I, 保育社  
 平山輝男, 1969 『薩南諸島の総合的研究』, 明治書院  
 長田須磨, 須山名保子, 1977 『奄美方言分類辞典』上, 笠間書院  
 吉田則夫, 1977 「身体部位の語彙における体系性と地域性について」(『高知大学教育学部研究報告』  
 第2部, 第29号)  
 天野鉄夫, 1979 『琉球列島植物方言集』, 新星図書出版  
 多和田真淳監修, 池原直樹, 1979 『沖縄植物野外活用図鑑』全6巻, 新星図書出版  
 長田須磨, 須山名保子, 藤井美佐子, 1980 『奄美方言分類辞典』下, 笠間書院  
 沖縄国際大学南島文化研究所, 1981 『沖永良部島調査報告書』, 同研究所  
 法政大学沖縄文化研究所, 1982 『琉球の方言』7, 奄美沖永良部島の方言, 同研究所  
 久野マリ子, 1984 「人体語彙の意味記述について——全国方言基礎語彙の調査研究から」(『現代方言  
 学の課題』2, 明治書院)  
 平山輝男, 1986 『奄美方言基礎語彙の研究』, 角川書店